

甲陽だより

発行所
西宮市甲子園高野町3番7号
甲陽学院同窓会
電話西宮(0798)41-0622番0623番
郵便番号616-63
印刷所
石川印刷出版社
神戸市兵庫区中坊通3丁目3-6
電話番号(078)575-3765(代)

ヤングも老壮年も

甲陽学院同窓会会長 原 清

一週に一、二回は必ず東京へ出かける私の忙しい飛行機の旅、その機中でたびたび耳にする会話がある。

「好都合なことに大蔵省の課長は僕の同窓なので……」「通産省には同窓が沢山いるので……」

大蔵省や通産省だけに限らない。大会社や大商社の急所、要所に学校同窓のコネを求めて、うまく立ち働いている人は大勢多いという証拠でもある。

私自身は「同窓会は商工会議所に非ず」という見解をもっているから、こうした機中の会話は、あまり愉快には聴けないが、もし、その人が同窓愛に燃えた高い立場から、至るところの職場との連繫、連帯感を深めているというなら、それは、それなりに大変結構なことだと思ふ。

同窓と呼びかけても、いささかの関心を示そうとしない人や、同窓会への不平不満ばかり陰でぶさくさ言いながら、ご本人は同窓会員としての最少限の義務、たとえば住所変更の連絡や会費納入さえも怠っているというような人ただだけは、一人もなくしたいものである。

同窓会の生感というものは面白いもので、まず学校を卒業した当座の四、五年は、事あるごとに母校を思い、母校を慕って、同窓会への出席率も高いが、その時期が過ぎると、しばらくは関心が薄らぐ。母校のことは気にはかかりつつも、壮年期の仕事に打ちこむ情熱とエネルギーの前には、同窓会との接触は少々疎遠になるようだ。

再び同窓愛の火が燃えはじめ。こんどは本格的に、量感のある、理智的な、信念的な同窓意識の定着である。

だから、同窓会の集りを見てみると、若い新入りの同窓生集団と、母校創立早々の卒業生を含む老壮年集団が目立つ。同じ同窓生でも親と子、孫くらいの年令差。でも、それが同窓の名の下では一対一。同じ飲み、同じ感激を分かち合っている人生を豊かに出来る。ここが同窓会の醍醐味なのである。

そこで、私は切望する。この集団の輪を、今年からは、より一層ひろく、厚くひろげよう。ヤングも壮年も老年も一緒にになって、手をつなぎ、高らかに甲陽学院讃歌を歌おう。今年も恒例の『夏の同窓会大会』が近づい

て来た。昨年と同様、今年も在校の諸先生、同窓ヤング諸君の趣向をこらした大会行事が練られているとき。願わくば太陽よ、その日母校に集う私たち幾百の同窓の上に、晴れた笑顔を見せ給え。

甲陽学院同窓会

夏季大会御案内

- 一、日時 八月二十三日(土)午後三時より
- 一、場所 母校 甲陽学院高等学校 校庭
- 一、会費 一般会員千五百円学生会費五百円 特別会員今春卒新入会員は招待
- 一、申込 準備の都合もありますので、なるべく早目に同封振替用紙で、年会費共々、お申込ご送金下さい。

今夏は昨年同様、テント張り会場で飲み放題食い放題のガーデンパーティ形式で行い、余興として会員参加のレクレーションゲームの

ほか、朝日放送の中村鋭ちゃんの来演が決定しています。なお、例年通りご家族ご同伴大歓迎、また右大会を機にクラブOB会、クラス会等をご計画下されば幸甚です。

お早ようパーソナリティ

中村鋭ちゃん

ご期待 来る!!

新入同窓会員を歓迎し、併せて全会員の親睦交流をはかる年一度の夏季大会は、昨年より些か趣向を変え、主客ともいべき新人会員の企画運営によることになった。昨年は生憎途中から集中豪雨に見舞われたにも拘わらず、従来にはない新鮮味を盛って誠に好評であった、今年も原会長の胆入りもあり、企画委員の望み通り、放送タレント界の第一人者、鋭ちゃんこと中村鋭一氏を招く夢が実現した。

氏は周知の如く、朝日放送の人気番組「お早ようパーソナリティ」の担当のほか、諸方面に八面六臂の活躍をみせておられる斯界切つての人気タレントで、その軽妙洒落な話術と歯に衣着せぬ鋭い社会時評、女人はだしの美声(特にリンドンと六甲嵐は十八番?)は、お相手役のパンダ、テルテルちゃん、脇役所としての中川大統領、和田酋長らの佳きコンビを得て、戦前派からティーンエイジャーに至るファン層の厚さは他に比を見ない。

現在のところ同氏にはゲストとしてお得意のナツメロ、それにお早ようパーソナリティの楽屋話などをお願いする予定であるが、氏は人も知る超ウルトラ阪神ファン、今年も例年になくタイガースの快進撃ぶりの所へ、そのホームグラウンドの甲子園球場に降る夏季大会会場ときては、氏のハッスル振り、ハプニング的興味も尽きない。何とぞご期待の上、お誘い合わせてご参加下さい。



二つの知恵

甲陽学院高等学校長 小河清磨

仕事十則

- 一、仕事は自分から「創る」べきで、与えられるべきでない。
- 二、仕事とは先手先手と「働きかけ」していくことで受身でやるものではない。
- 三、大きな仕事と取り組め、小さな仕事は己れを小さくする。
- 四、「難しい仕事」を狙え、そしてこれを成し遂げる所に進歩がある。
- 五、取り組んだら「放すな」、殺されても放すな、目的完遂までは……。
- 六、周囲を「引きずり廻せ」、引きずるものと、引きずられるものとは永い間に天地の開きができる。
- 七、計画を持って、長期の計画を持っておれば、忍耐と工夫と、そして正しい努力と希望が生れる。
- 八、「自信」を持って、自信がないから君の仕事は迫力も粘りも、そして厚味すらない。
- 九、頭は常に「全回転」、八方に気を配って一分の隙もあってはならない。サービスとはそのようなものだ。
- 十、「摩擦を怖れるな」、摩擦は進歩の母、積極の肥料だ。でないと君は卑屈末練になる。

一つ一つの文章は、推敲もたたりないし、雅拙ではあるけれども、このように十則として並べたところが妙である。

そこに先人達の処生の集積があり、人生の歴史が裏打ちされて煮詰めて、まともでも、又もつと註釈を加えてみても、その力が弱まるにちがいない。このように土地の臭いを残して並べてあるからこそ、この十則を観る人に、その時、その状況をとりえて、何かを感得させるのではないだろうか。

世に格言、俚諺は多いが、このように庶民の中にうもれるように生きている知恵の一つの面を觀せられた思いであった。一方では、このような無名のものとは異なり、世に偉人、賢人とうたわれた人のものである。これらを較べて、ゆっくりと考えてみたいものだ。この十則を讀んで感じたところである。

- 因みに福沢諭吉の心訓なるものを記して、両者を較べ味わいながら、願想を兼ねて、この夏の暑さ凌ぎにしたいと思っ
- 一、世の中で一番楽しい立派なことは、一生を貫く仕事をもつことである。
 - 一、世の中で一番よい仕事は、人間としての教養のよいことである。
 - 一、世の中で一番さびしいことは、仕事のないことである。
 - 一、世の中で一番みにくいことは、他人の生活をうらやむことである。
 - 一、世の中で一番尊いことは、人の為に奉仕し、決して恩に着せないことである。
 - 一、世の中で一番美しいことは、すべて
 - 一、世の中に愛情をもつことである。
 - 一、世の中で一番悲しいことは、うそをつくことである。

会員名簿整理

次の方々が二月発送した甲陽だより二十二号の返戻のあった方です。

第一回	岩田 博	第三十六回	大家寛治、飯田裕朗、北條幸造
第二回	庄本茂、山家俊次、森田定雄	第三十七回	中川剛宏
第三回	清水英三	第三十八回	生松茂彦、小川雅弘、吉用宗弘
第四回	井上康司	第三十九回	板谷泰助
第五回	上西和夫	第四十回	三戸孝雄、尾家利夫、中西康方
第六回	東目下宏	第四十一回	瀧手達郎
第七回	萩原利次、小松満夫、老崎健夫	第四十二回	重田 洋、早崎 淳、八幡誠朗
第八回	平井正一	第四十三回	浦沢英一、北村惣一郎
第九回	下村 斉、高寺保美	第四十四回	大鷹 統、北川公一、竹内 修
第十回	高岡市既、安孫子兼弘	第四十五回	繩田和良、伊藤 宏、梅村幸彦
第十一回	岡崎和久	第四十六回	青木 烈、藤吉建二、斉藤知彦
第十二回	川喜多義弘、小出泰弘、湯原真	第四十七回	金島克己
第十三回	塩谷久雄、竜竹璋夫、原 淳三	第四十八回	永井 隆、湯原 宏、稲垣隆雄
第十四回	福中敬市、志磨英二、平田暢成	第四十九回	那須絃一、芦川 洋
第十五回	増田 稔、立川達治	第五十回	山本敏雄、長谷川祐蔵、米田郷彦
第十六回	松岡範真、和多利俊作、織山寛	第五十一回	古島 浩、奥田弘美、藤原清富
第十七回	木村庸吉、榎本能一	第五十二回	有田 茂、中野為夫、暮石正義
第十八回	白木一夫	第五十三回	国生 肇、野口善国、則岡節雄
第十九回	下倉啓亮、山本博一、木村尚郎	第五十四回	笠井隆一
第二十回	山中成一、宮 清	第五十五回	吉良康宏、佐野春樹、石原 隆
第二十一回	平木精二、寺田 晃		篠崎公一、土岐直人、佐々木正文
第二十二回	住田和明		磯井與一、壁谷論、勝田順一郎
第二十三回	江川 啓、松井敏男		小林謙一
第二十四回	鈴木 登、国府 彪、三崎治郎		中島啓一、三沢順一、今崎善夫
第二十五回	坪井淳一、山本勝也、寺本道郎		辰岡正樹、後藤文昭、寛 和憲
第二十六回	樋口義也、藤原重信		宮嶋 真、佐藤 徹
第二十七回	真田 実、芝湖和夫、八木昭夫		西田正吾、寛 宗憲、大住 聡
第二十八回	松田 進、岐中一良		北村英和、山口 功
第二十九回	畑中孝夫		山内伸一、矢野研二、大前誠一郎
第三十回	間世田是方、堀越昭一		竹田昌弘
第三十一回			内田陽介、佐藤圭一
第三十二回			中島徳彦、柿原稔、川本正二郎
第三十三回			松尾敏伸
第三十四回			
第三十五回			

総 会 報 告

三月二十五日、母校の高校において午後六時から開催された理事会と総会とは、ここ数年間その例をみないほどの盛会で原会長以下当日出席された五十三名の委員は母校同窓会発展のために熱意溢れる討議を行ないました。まず前年度の事業報告と決算の承認がなされ、合田相談役から今年度の事業報告と予算の審議を主要議題として説明が行われましたが、とくに年会費五百円を千円に値上げすることの提案に対し活発な意見の交換がなされました。

(一) 四十九年度事業報告

主要行事日誌

49年5月 夏季大会打合せ、この会合は前後六回にわたって行なわれた。

7月 「甲陽だより」20号印刷、発送

8月 夏季大会(会場)高校講堂、悪天候のため運動場での懇親会は食堂で実施。

9月 理事会

12月 法人、学校、同窓会の三者懇談会

50年1月 原会長、法人に年頭挨拶

2月 卒業式、原会長祝辞、卒業生に対し、記念品(認印)贈呈。

3月 理事会、総会を母校高校で開催。この一年間、専任の川口氏死去のあとをうけ合田、新山両氏によって同窓会事務が運営されてきました。合田顧問理事の自説でありましたが、誰か若い人で世話役をかけて出てくれる人があればと主張しておられますので、ご希望の方があれば何卒同窓会本部まで申し出られることを切望しています。

(二) 五十年事業計画

1 「甲陽だより」年二回発行を堅持する
2 夏季大会は前年度意欲的にとりくみな

がら、悪天候のため実施出来なかったことを何とか今年度は新会員の努力によって成功させる。

3 会員名簿は五年に一回刊行することを 目途として準備する。

この総会で決定された重要事項として、昭和五十一年三月卒業生に対して、従来同窓会入会金三千円であったものを三千円に増額するということ。とともに会員の年会費五百円を千円にするというものであります。とくに審議は後者に対しておこなわれましたが出席委員全員が賛成し、昭和五十一年度から実施することとなりました。当日若い卒業生委員はいま一杯のコーヒでも三百円する位であるから年会費千円は当然のことであると積極的な増額賛成の意見が述べられ合田理事らを悦ばせたことでした。不況下、出費が多端の折柄、実に恐縮ですが同窓会発展のため何卒協力のおど切にお願いたす次第です。なおすでに終身会費ともいうべき十ヶ年分以上納入しておられる会員に対しては事務局より改めて連絡をしていただくことになっていきますのでご諒承下さい。

総会に於ける経過は別記の通りですが、例年の如く事業報告、事業計画の承認を得ましたが、同窓会とは云え一応余り変わった事をするのではないが其の内容に於て察知による効果的なものや行って行くのが良いので同じ事をするのについても協議が必要なのは勿論であり、会員の繰出せられる会費によって事業をやるのであるから尚更の事でもある。只決算報告にもある通り年会費が三分の一の会員納入であることが淋しい事である。事業即金銭である、良い事をやるにやれない事だけはなんとか凌ぎたいものだと思ふ。一層のご協力を願いたい。四十九年度決算報告と五十年年度予算は次の通りです。但し年会費更正により会費収入は異動しますが年度末に調整致したいと思ひます。

(四) 昭和五十年年度予算

収入の部

科目	予算額	摘要
会費	1,420,000	会費 500×2,000人 入会金 2,000×210人
利子収入	170,000	
雑収入	20,000	名簿売却など
繰越金	293,398	
計	1,903,398	

預り金 505,000 50年度分 268,500
51年度以降分 336,500

(五) 昭和四十九年度決算

収入の部

科目	予算額	決算額	差引増減	摘要
会費	1,420,000	1,475,000	55,000	入会金 432,000を含む
利子収入	140,000	177,763	37,763	基本金 145,806
雑収入	10,000	59,590	49,590	寄付金、研修費、名簿代
繰越金	336,962	336,962	0	
計	1,906,962	2,049,315	142,353	

備考 大会費収入 189,800

支出の部

科目	予算額	摘要
人件費	550,000	二人分毎月手当及夏・冬手当、校内寸志
交通費	50,000	通勤費など
需要費	30,000	通信費、事務雑費
会議費	160,000	総会、理事会、懇談会など
事業費	850,000	甲陽だより、記念品、大会費新同窓生名簿など
雑費	125,000	振替料、研修費など
予備費	138,398	
計	1,903,398	

支出の部

科目	予算額	決算額	差引増減	摘要
人件費	450,000	460,000	10,000	毎月手当 360,000夏・冬手当 85,000 校内寸志 15,000
交通費	30,000	21,900	- 8,100	九月分より通勤支給
需要費	20,000	36,595	16,095	卒業アルバム、事務雑費
会議費	100,000	161,590	49,290	総会・懇談会・理事会
事業費	910,000	829,622	- 80,378	甲陽だより、大会費、新卒名簿、記念品など
雑費	150,000	157,210	7,210	応援タレ幕、振替料、慶弔費
予備費	246,962	90,000	-156,962	銭別、研修費
計	1,906,962	1,756,917	-162,845	

甲陽高商・工專同窓会総会

戦中戦后35年

甲陽の専門学校卒業生の第一回同窓会総会は、昭和50年4月20日、思い出の香炉園学舎において、数百名の出席を得て、盛大、厳粛に挙行された。

戦中・戦后に、或は野戦場に或は職場に、逝去された諸兄のご冥福を祈る黙禱を捧げることよって会は開始され、桑田甲陽学院同窓会副会長のご挨拶。続いて原会長の甲陽中高と同様、甲陽の専門学校卒業生を同窓会に統合することの意義を強調される格調高いご挨拶を受け、参会者一同、深く感銘した。

恩師、中山種次郎先生、坂本弥三郎先生、桐田尚作先生、吉田安雄先生、赤坂右逸先生、柴田徹士先生、山田隆晴先生、太田登先生等の諸先生が白髪ながら元氣なお姿を見せて下され、三十有余年ぶりに打撃した我々同窓会々員一同は参会し得た意義と幸福とを噛みしめ得た。同時に今は亡き諸先生の遺徳を偲んだ。就中、中山先生の回顧談話、坂本先生の学問に対する厳しさと甲陽創設当時の思い出話を興味深く拝聴した。続いて、甲陽中高校長先生の謙虚な御言葉をいただき、会は進行された。(尚、出席先生と財団代表とに記念品を進呈し、いささか御恩に報いるの微意を現わしたことを附記したい)。

甲陽高商工專の校歌(伊賀駒吉郎初代校長作詩)を伴奏レコードの援助を受けながら合唱し、意気昂り、各期より代表スピーチが紹介され、戦中・戦後の苦難を凌いで今日に到った苦心と将来への展望(第一期、柏井君のスピーチより)を述べて、一同、五年後の総会へ新たな前進を誓う。

一応の行事(総会)が終ったところで、恩師の首領により乾杯を行い、母校並びに會員

諸兄の益々の弥栄を祈念し、年代毎に区分されたテーブルを中心にして、互の交歓に入った。

歓湧くところで、恩師の打とけたご挨拶を頂戴し、辰馬本家寄贈の清酒白鹿も一段と消費されていった。

最後に、久闊を叙すグループが三々伍々、校庭にたむろする中、諸先生を御送り申し上げ、次回を期待して、同窓会総会は有意義に挙行された事は、特筆大書しておきたい。

(付記) 今回の挙の成功は、甲陽中高の教頭中島先生並びに職員方の陰の努力と心よく会場を提供していただいた学校法人、そして同期生中の推進役、数名があったことにより、紙上を繕りて深く感謝したい。(小原記)

ご挨拶

桑田正造

甲陽高商・工專の創立35周年祝賀式を迎えるにあたり、祝賀のお慶びのために、来賓各位・同窓生の皆様には、公私ご多忙の中を、ご出席下され、私、同窓会副会長と致しまして、有難く厚くお礼の言葉を申しあげますと共に、ここに一言ご挨拶を致したいと存じます。

本日の記念式の発会につきましては、昨年の九月頃二期生の和田君より、本年が、当甲陽高商の創立35年の記念すべき年にあたりますので、これを契機として、全高商・工專の同窓会を、是非とも開催したいとの強い希望が、二期以降の方々から持ちあがっている中で、先輩である一期生共々賛同して欲しいとの大へんな情熱で、小生へ依頼があり、特に、同窓会会長原氏のご就任以来、不肖私が高商の同窓会副会長という大任を頂いておる

関係もあり、本日の会合についての日時その他行事についての協議を致したのであります。

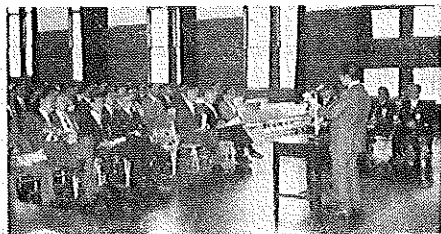
私も、卒業以来30有余年既に、戦後昭和の半世紀を越えましたが、甲陽高商卒業という榮譽を受けたわれわれにとって本日のこの会合が、こんなに盛大に挙行出来ましたことは、同窓生皆様の心の結集以外の何ものでもないと思っております。

今日の本会の準備のために、各期の代表の方々には、日夜談にご多忙な時間を、何回となくさいていただきお集まり下さいましたことを、心から厚くお礼申しあげます。尚、学校当局中島久先生には格段のお世話になったことを、本席から重ねてお礼申しあげます。

私は、35年前に学んだこの懐かしい母校が、今尚、美しく存在し、しかも、その講堂内において、本日のこの行事が取り行われ、懐しい恩師の諸先生の誠にお元氣なお姿に接し、全卒業生が、感謝の気持ちをもって参集されただけで、本会合の目的は、十分に達せられたと思っております。

本日は、出来るだけリラックスな和やかな会合の中に、卒業以来35年間の思い出の数々を、語りあつていただく、懐旧の会とも申しあげたいのであります。

さて、この会合には、東京方面など遠隔の地からご来会の方々もあり、どうしても出席できなかつた同窓の方々の中には、長文のお便りをいただきましたので、各位の心は、この講堂に、充満していることを推察します。



この様な心の集いである私どもの高商・工專の同窓会も、昭和38年に、甲陽学院同窓会に合流させていただき、毎年2回発行の「甲陽だより」が、私どもの手もとに郵送されております。当初年会費の五〇〇円も、過日十数年振り、倍額になりましたことを、副会長の立場から一言申しそえておきます。

本日は、誠に貴重な意義のある祝賀会でありますので、最後まで宜しくお願い申しあげます。

本会のよりよき発展をお祈りして、経過報告等々喜びのことばといたします。

偶感

合田生

何の会でも横の糸がうまく縦の糸とマッチしているときよくいく。殊に同窓会のように、年令も異なり、職業も千差万別といった集いでは、これが一番大切な事だと思ふ。

現在同窓会の理事幹事は、卒業の期毎に一応定めてはあるが、之は別段それぞれの同期生ごとに互選したものでなく、ご存知の五十周年記念行事の際に、在校の常任理事がとりあえず推薦してその後今迄お願いしている方々であつて、中には個人的にご都合の悪い方もあろうし当を得ない場合もあるのではないかと思われる。

本部で事務を担当している者からいえば、なるべくなら各期で同期生の集いの中心になつて活躍されている方に理事幹事をして頂ければ、同窓会の縦横の連続も密となり、互の意志の疎通に誠に好都合かと思ふのである。

別段急いで幹事の改選を、という訳でもないし、又今の幹事で結構と考えられる期の方はそれでよいとして、右に述べた意味から、今後クラス会同期生等の機会にはお互いお話し合いの上、適当と思われる方を推薦して本部にご連絡下されれば幸甚と考える。よろしくご協力下さい。

会員だより

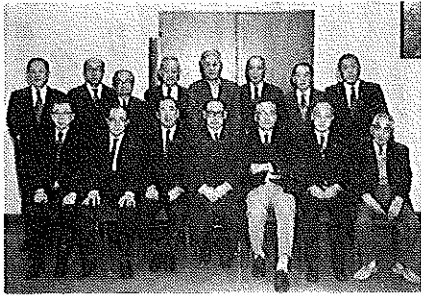
第十二回

甲陽三三三三会

昭和三年三月三日とは私等七回生の卒業式の日でした。此の日を記念して毎年三月三日はクラス会をする事を決めてからすでに十二回を数えて居ります。種々な事情で休会して居りましたが、三年ぶりに神戸三宮の金龍閣で開催十五名の出席を見ました卒業して四十七年目を迎へ頭は白くうすくなってもカクンヤクたるもので大いに話し大いに笑った。又、浜田清次君の調査で名簿上すでに鬼籍にあった級友伊藤巖君の生存が判明すると云ふ嬉しい話も出ました、和気あいあいつきぬ名残りを惜みつつ次回を約して午後九時散会した。出席者は、

- 安部輝雄、大西治三郎、河合文男、川合秀雄、河東利男、金沢幸雄、津田一太郎、中村壮二、中嶋清之助、橋本勝弥、浜田清次、浜野勇、古塚綾、茂幾信夫、山辺正。

計15名



- 伊藤巖 滋賀県大津市坂本町九九一七
- 電話 〇七七五
- 七八一四八
- 〇〇
- (記中嶋)

第37回 甲十会

去る11月の秋日和の午后、みなと神戸の中華飯店に於いて催され、久方振りに参席する機会を得ました。

定刻前後して集まること30名余、恩師朝田先生を迎えての盛会で清瀬・浜田両当番幹事のご苦勞で一段と華やかな同窓会となりました。ことは、参集各位には、殊の外、満足気味にて次々参加の楽しみを満喫さしてくれたようでした。

そこで憶い出されることは、我々甲十会々員は、そもそも大正末期に甲陽の門に入学したもので、それより数えて、ここに50年に垂んとすること——この半世紀に及ぶ永い我々の交遊・交誼というものは、通常そうざらには、あることでないことを想起して今更ながらこの尊重なる交誼を大切にしてお互いに人生終末——終着駅まで進行したいものだと祈願するものであります。

ここに人生六十有年を数えた会員各位には、外貌は、白髪、猫背の老姿は、さげられませんが、各位それぞれに功成り、名を得て悠々自適の境地に今日入っていることを考えて大正人の真骨頂が、うかがえるようで、ご同慶に堪えない次第であります。

第38回 甲十会例会

平素兎角当会にご無沙汰勝ちだった小生にとって、此度の例会の案内に接して殊の外うれしく、久方振りに同窓諸兄に逢える喜びで何より待たれたものでした。

当日は、折柄の五月晴れに恵まれ大阪梅田の会場は、何年振りか以前に催された勝手知ったところだったので余計気もそぞろでした。定刻前には既に大半の参集があり、今なおカクンヤクたる朝田恩師を始めとして元氣一杯の面々二十数名の参集があり、賑々しく催された次第です。

仄聞するところ今回の例会に初参加らしい石橋・松木両兄の元氣な姿が見受けられ、卒後四十数年振りの再会であるためにひとときわ注目をあびており、会半ばにして両兄のユニークな自己紹介もあるなど一段と会場は活況を呈したものでした。

それにしても、当甲十会は終戦直後より始まって以来、爾後一年又、半年振りの会合を重ねて、ここに数えて第38回と相成なるものでして、学年同窓会としてのその永続性は、まことに特筆ものと一同、自負しているものであります。これ偏に世話役は勿論同窓諸兄の絶大なる協調心からきたものと一同確信している次第であります。尤も時偶、会員の中には忌ニユースが入って来て残念乍ら永久欠番のやむなきに至ることもありすが、又、今回の如く初参加——新登場の嬉しいニュースもありますので大きな減少もなく七十余名の消息の判った会員でいよいよ構成されているようで、当会にとって、今後益々嬉々とした盛会が次々続くものと確信する次第であります。

尚、来春は、当会主催40回目を迎えるに当り、画期的集會——東西合同の例会を名簿班辺りでどうかとの意見も出ていますので、まことに意気壯観、いよいよ以て当会の住衣振りに列目される次第であります。

次回、当番幹事は高城、福田両兄が選任された由、両兄の一層のご尽力を願ひまして、参席の所見といたします。

甲十会 万々歳—— (昭50・5・18 A・B生)

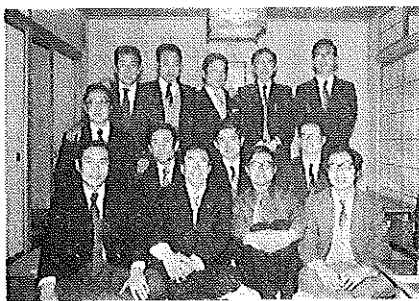
昭和30年卒 十数年ぶりに歓談

小河先生

49・2・9 舟越 辰緒

拝啓 時下益々清栄の段お慶び申し上げます。入試期を控え、何かとご多端のことと存じます。平素は、無音にて申訳ありません。昨年、は実に10数ぶりに同窓会にてお会い出来まして嬉しうございました。

さて先日、珍らしく在京の卒業生(30年卒)が13人集り、一夕歓談しました。その折の写真をとりましたので、送らせていただきます。全員サラリーマンですが、年令的にひとつの期に來ている連中で、仕事と家庭をウーン云って奮闘している感じです、全くインフレには困る感じですが、元氣にやっています。皆様にもよろしくおつ



た下ささい。

日 時 S 49・1・25

場 所 代々木、三菱重工代々木寮

メンバー 後列左より 林、鮎貝、井上、福田、吉田。

中 左より 西松、松浦、但井、根東。

前 左より 矢野、加藤、舟越、浦野。

(松浦君の世話)

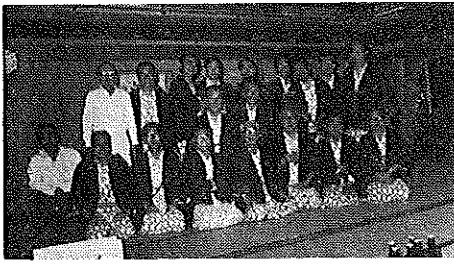
第三十六回卒

学年同窓会

新緑が目にしみるような有馬の国鉄・保健指導所で、去る五月十日(土)夕方、我々、第三十六回卒業生のクラス台同窓会を二年振りに開催しました。

思えば昭和三十年に甲陽学院を卒業以来は、二十二年、記念すべき同窓会ということ、はじめての宿泊行を計画しましたが、それぞれ各分野の第一線、あるいは企業の中堅幹部として活躍中の面々が多く、又その半数近くが東京はじめ全国各地に点在している関係からか、(あるいは交通機関のストライキがまだ解決していないということもあって)予想外に参加者が少なく、参加者十六名といういささか淋しい感がないでもありませんでした。

しかし、在学中お世話になった諸先生のうち、ご多忙の中を小河校長・宮川・永井、改田の四先生がご出席下さり、我々十六名と合わせて総数二十名、盃を重ねつつ放歌高吟、久方振りの再会に時の経つのも忘れて、二十数年前の思い出に話の花を咲かせました。



中には二十年振りに顔を合わせる面々もあり、又頭髪の薄くなったもの、すっかり中年太りが板についたものなど、二十年前のイメージとはかなり違った連中が多かったです。か、(か)く言う小生も他聞にもれず、もっともイメージ

ジの変わった代表のように言われましたが、(;)、そこは六年間机を並べた間柄、三十分、一時間と時が経つにつれて二十年前の修学旅行を再現する雰囲気となり、またたく間にビール壺が林立するところが、二十年前とは異なるどころでした。

宴の最後に、次回の幹事を陶山、舟越の両君にお願いすることを決め、部屋に戻りましたが、小河校長先生からいただいた舶来洋酒をかこみ、夜の更けるのも忘れて飲談を続けました。

翌十一日朝、二年後の再会を約して有馬を後にしましたが、是非次回の会には更に多くの方が参加下さるようお願いしたいと思います。

最後になりましたが、無精な幹事役の小生に対して多大のご尽力をいただいた藤井保男君(大阪鉄道病院)、田村真也君(甲陽学院高校)のお二人に対して、心よりお礼申し上げます。(浅井記)

美術OB会

この度、我々、「美術部OB会」では、第3回の展覧会を開きました。場所は、神戸三宮センター街、「錦画廊」。期間は5月29日から、6月3日迄の6日間でした。

出品したメンバーの中には、「高校卒業以来、絵筆を持ったのは、はじめて、ざっと10年振りかなア。」という人もあれば、「描きたいんだけれども、なかなかですなあ。今度も、昨日の夜やっと出来上りました。」と撤人の時に話す人等々。しかし、結局は、各人共に「やっぱり、画を描くのは楽しいものですなあ。」という結論。

ともかく、そんな事情で、出品者は総数10余名。小河現校長先生や岡西先生(元美術担当)を筆頭に、上は、昭和36年卒学生から下は昭和45年卒学生までが、ずらりと顔を揃えました。



展覧会期間中は、皆さん、ソワソワしておりました。夕方仕事が終わると、会場に近い連中はすぐに会場へかけつけ、お互いの作品の批評にひとしきり花を咲かせたり、会場で珍らしい人に会って、お互いの近況を報告しあったり、何かと楽しいです。

そんな中で、会期中の土曜日、5月31日には、OB会の晩餐会を開きました。今回は、家族もいっしょにやりました。今回事で、いつものメンバーの他に、奥さん5名、子供5名を含めて、全部で、25名と、大変にぎやかな顔ぶれとなりました。

その上、大変御忙しい中を、小河校長先生、中島久先生、そして、岡西先生は奥さんと子供さんを連れて御出席になり、食事の後も、それぞれで、酒を肴に、絵画論を論じるとかと思えば、嫁さんの話にのろけるといった調子で、夜更けまで、話はつづきました。

展覧会の方は、と言えば、なかなかの盛況で、6日間で、延べ二百二十と百三十人の方が観に来て下さいました。OB、或は現後の方の中にも、我々の展覧会に立ち寄って下さった方が、かなりおられたと思います。その方々には、この紙面を御借りしまして、深く御礼申し上げます。

そんな、こんなで、我々の第3回目の展覧会も、無事、終わりましたが、まだ終わってばかりというのに、今度は皆で写生旅行に行こうとか、その展覧会はどうしようかという

声が早くも聞かれる今日この頃です。こうやって、序々々ではあります。OB会も成長しております。しかしながら、我々が非常に残念に思っておりますのは、昭和46年以後に卒業された若い方々をまだ仲間を持っていないことです。

もし、我々の仲間になりたいた方は、後記致します幹事まで御知らせ下さい、もちろん、どなたでも歓迎致します。それは、皆様、次の展覧会の際に、又、御会いしましょう。

(S41年卒 山崎仁司記)

※美術部OB会に関する御問い合わせは、幹事S41年卒倉本豊(S41-821-893)迄、御願致します。

出品者名(敬称略順不同)
小河清磨、中島 久、岡西 進、森本正義、平野敬則、辻本勝見、水口直次、井上康宏、倉本 豊、山崎仁司、種田 明、小野耕司、中条栄彦、宮崎清志、永田元康、岡田三彦、佐藤啓一、田中泰雄、日比野一成、斎藤文夫

編集断想

◇小河校長の原稿に目を通していてふと思った。「仕事十則」はどうしても黒地に金びか文字でないと感じが出ないような気がする。

そこで、「この部分をぜひ金びか文字で印刷してもらおう、近年の印刷、複写技術の発達からすれば、それぐらい出来るだろう。」などと勝手な妄想をめぐらしていたが、結局、予算の関係で(?)断念せざるを得なかった。石川印刷さん、金びか文字はやっぱり無理ですか?

◇XY||AB代数の問題にあらず。「平素兎角当会にご無沙汰勝ち」などとお書きになっておられるのですが...

浅野先生に

雑誌「こまくさ」

を贈る

生物部卒業生

戦前から戦後にかけて、甲陽の生物科の担任として、そして、生物部の顧問として卒業生に大きな影響を与えてこられました浅野昌隆先生が、母校甲陽を辞められて(48年3月)、早くも2年の月日が流れました。先生

浅野先生にお贈りすることができ、先生にも大変喜んでいただくことができました。この雑誌は、タイプ印刷B5版置頁から成り、浅野先生には表紙のコマクサの絵を始め、先生が長年にわたり集積されてこられた貴重なデータをもとに、「阪神地方および中部山岳地域のハナアブ科」というレポートを書いて頂きました。その他の主な内容としては、生物部卒業生による研究報告が4編、思い出や山行記が9編、そして、生物部卒業生の近況紹介、生物部の略年史等があります。

親睦を深めると共に、母校の現後部員諸君ともより一層親しみあるつながりを続けていきたいと念願しておりますので、卒業生各位の倍旧の御協力をお願いする次第です。最後になりましたが、浅野先生の御健康と母校生物部の一層の発展を祈りたいと思っております。

にはその後、郷里の富田林の方で御静養中でありましたが、昨夏あたりから、お身体の調子も快方にむかい、カメラを手に金剛山系を歩かれるなど、お元氣にお過しであります。先生が甲陽を辞められました直後、生物部卒業生有志の間で、先生への感謝の気持ちを表わすと共に、先生への感謝の気持ちを表わすと共に、先生への御健康を祈念して、記念出版の話が持ち上がりました。その後、多数の生物部卒業生各位の御協力を得、今冬ようやく、雑誌「こまくさ」が完成し、

この記念出版に際しましては、できるだけ多くの卒業生の方の御協力を得るべく、御案内申し上げたつもりではございますが、幹事の怠慢から名簿の不備その他の理由により、一部に連絡漏れがありましたことを深くお詫び致します。尚、残部がまだ相当ございますので、御希望の方にはお送り致します。左記幹事まで、一、五〇〇円(送料とも)を添えて御連絡頂ければ幸いです。

△記念出版事業協力者芳名録▽花木 隆、田中 慶一(36)、小田中 健(37)、高木 義興(39)、阪田 純一、阪上 耕三、松本 幹夫(40)、佐野 亨(41)、大塚 昭、池内 英治、木村 通夫、杉野 広一、苗村 康次、橋本 誠(42)、佐藤 茂、岩井 博行、榎本 滋(43)、本田 忠士、伊藤 貢、秀、大林 重信、四宮 景虎、津久井 啓太郎、遠山 雅夫(44)、木下 タロウ、浅野 悟郎、杉田 匡太、田中 将宏(45)、藤江 隆伍(46)、遊 磨正秀、大倉 幸彦、森脇 久芳(47)、湯川 英彦、吉岡 亨(48)、中江 史郎(50)。

カラコルム紀行

西内 博

(五十回卒)

「一歩一歩、踏みしめるように歩く。雪はベタつき足は重い。頂上にははるか上である。サブリーダーが、上部の急な雪壁を見あげて静かに首をふる。高度六千三百呎、頂上までは、まだ千呎もある。振りかえると、中国領の山々そしてインド領の山々が地平線の向うまで続いている。ここまでかと思うと、くやし涙がにじんでくる。」

らである。大学に入ると、私は、学園闘争の中に飛びこんでいった。しかし、そこにすでに築きあげられていた闘争というものはあまりに私にとつて異質なものであった。闘争に幻滅するとともに、山登りに熱中していった。

2のあるカラコルムである。ネパールより、内陸にあるため、モンストンの影響もほとんどなく快適な登山ができる場所である。しかし政治情勢は極めて悪く、中印の勢力争いのために長い間、封鎖されていたのである。いつ解禁されるかわからないというようにな山へ我々は申請書を送り続けたのである。今度の許可も出発の一ヶ月前までわからなかつたので、二十万円の資金集めと、食料、装備の準備は、目のまわるような忙しさであった。

「四年間あこがれ続け、そして粘り続けた私の海外遠征はこうして幕をじじたのである。私が登山を始めたのは、神戸大学に入ってから

もちろん、私もその例外ではなかつた。大を出て、社会人となつてもただ行きたく、ついに機会を得たわけである。ヒマラヤといつても、私の行った所はエベレストのあるネパールヒマラヤではなく、K

こうして試験の一夜漬さながらのパーティーは、パキスタン航空の機上の人となつたのである。本隊は六月二十二日に出発し、カラチをへて、ラワルピンディに向つた。カラチが大商工業都市であるのに対して、ピンディは政治と学術の中心都市である。人間もはるかにピンディの方が親切であった。

「四年間あこがれ続け、そして粘り続けた私の海外遠征はこうして幕をじじたのである。私が登山を始めたのは、神戸大学に入ってから

もちろん、私もその例外ではなかつた。大を出て、社会人となつてもただ行きたく、ついに機会を得たわけである。ヒマラヤといつても、私の行った所はエベレストのあるネパールヒマラヤではなく、K

こうして試験の一夜漬さながらのパーティーは、パキスタン航空の機上の人となつたのである。本隊は六月二十二日に出発し、カラチをへて、ラワルピンディに向つた。カラチが大商工業都市であるのに対して、ピンディは政治と学術の中心都市である。人間もはるかにピンディの方が親切であった。

かにピンディの方が親切であった。ここでトラックをチャーターし、三日間のトラックの旅がはじまるわけであるが、想像はしていたものの非常につらい旅であった。道はインダス川に沿って遡って行く。日本の観先道路ほどこわくはないものの、道路から川まで数百呎のガケなどというのものも珍しくなく、対岸は数千呎かなたというスケールの違いには驚かされる。フラフラになって、なおも八人の隊員と三トンの荷物は、七台のジープにわかれ、七月三日カブールに集結した。ここで文明の利器と別れ、いよいよキャラバンの開始である。コックとハイポーターを雇いさらに約百人のポーターを雇う。いくら人件費が安いとは言え一日六百円である。早く着かないかと心配しているサーブを横目に、ポーターはまったくのマイペース。十分ほど歩いては五分ほど休む。こうしてベースキャンプを築いたのが七月十七日であった。第一、第二キャンプと順調にキャンプを建設し、第四アイスフォールを突破して第三キャンプを作り、頂上へのルート仕事を初めました。八月十一日に、登頂を断念しました。登山を終える頃には、英語とウルドゥー語と日本語のチャンポンで何とか話せるようになり、ポーターたちともすっかり友達になり、帰りに、彼らの家に寄り、ごちそうしてもらうなど、まさに主客転倒、常にポロポロの服を着た情けない遠征でした。しかし、パキスタンの人達は、我々が考えた以上に日本を注目しています。ヨーロッパよりもはるかに教育の遅れているパキスタンでさえも、日本に対する認識は、ヨーロッパ以上だと思えます。

近況報告

先輩の寄金に感謝

野 球 部

いよいよ夏の全国高校野球大会の兵庫県予選が始まる時期となりました。本校野球部員数もここ数年安定してきました。今年も十六名という充実した数になっておりますが、その反面、技術が充実しているとは言いがたい点を甚だ残念に思っております。昨年の新チーム結成以来の戦績を見ましても8勝7敗1分と、辛うじて5割の線を越えている状態です。総合力において、最近の本校は夏の一回戦ボーイのような評価を受けても止むを得ないかも知れませんが、過去に栄光ある実績を示しているのに鑑み、それに恥ずかしくないうよう、またOBの方々の築かれました伝統を汚さないよう、意気込みに燃えて連日練習に励み、試合数を多く消化して場数を踏むことにより、実戦経験を積んで行く所存でございます。

ただ残念なことに、生徒会で野球部会計として認められた予算が、ボールとバットのみの購入を許されているに過ぎませんので、予算面でも毎年大変苦心をされている現状です。この窮状を大先輩の山野井萬氏(四回卒、全国大会優勝の時活躍)に訴えました所、心よく御理解頂き、三十四回卒の水野寛氏などにも御連絡を取って下さり、野球部OB全員に寄金を呼びかける手筈を整えて下さいました。そして、呼びかけの書状、現金封筒・返信用封筒の宛名の印刷、切手の手配等の全てを山野井氏の方でして頂きました。その発送方は現役部員の手をわずらわせず、作業も完了し、発送致しました所、目下(六月十六日現在)二十名近くの先輩から御寄金頂きました、八萬円余に達しております。六月一杯を

限度とし、目標額三十萬円を目指しております。

野球部OBの方々には、山野井氏を始めとして、今迄何かと御世話様になっておりますが、経済面や物資面のみならず、精神面や技術向上の為のコーチ等の面でも今後何くれと御支援、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

寄金が目標額に達しますことを念じつつ、先輩諸兄に深く御礼申し上げますと共に、今後とも御壮健にてお過ごし下さいますことを祈り、この紙面を借りまして感謝の意を述べさせて頂きます。(三十六回卒、田村真也、英語教諭、野球部監督)

サッカー部

新人戦阪神大会に優勝!

秋の高校サッカー選手権予選に敗退(対西宮東)したわれわれは、冬の新人戦阪神大会必勝を胸に秘め、毎日激しい練習を繰返して来ました。中村先生をはじめ、多くのOBの支援を得て、絶好調で試合に臨んだわれわれは、一回戦西宮北を2対0で薙り去り、二回戦対泉伊丹の試合では、PKの1点を守りきって勝ち、三回戦強豪泉尼崎と当りました。相手のシュートが三回もゴール枠に当りながら入らず、試合終了寸前の劇的なシュートで1点をもぎ取り、そのまま逃げきりました。波に乗る甲陽は、準決勝で川西緑台を3対2で敗り、関学と決勝を争うことになりました。多分、ツキもあったのでしょう。関学は押しているが点を取れず、甲陽は逆襲からエース林がゴール左すみに蹴り込み1対0とリード。関学の猛攻をかわして、ついにタイムアップ。この瞬間に十一年ぶりの阪神大会優勝が決したのでした。

県大会に勝ち抜き、近畿大会に出場することを次の目標として、毎日練習に励みまし。県大会の二回戦(一回戦不戦勝)では、

暮合を撃破し、準々決勝は浮心。甲陽の組織プレー対浮心の個人技という形になり、結局普段の力が出せず0対2で敗退。そして、最後の近畿大会出場権をかけた敗者復活戦でも、市西宮に0対1で敗れ涙をのみました。甲陽は阪神大会、県大会を通じて固い守りとツキ(努力によってかちえるもの)に恵まれ勝ち進んで行きましたが、最後の二試合では攻撃のエース林を生かしきれずに敗れました。

新学期に入り、二年生を中心とする新チームのメンバーは、春のシーズンをむかえて激しい練習を行ないましたが、市内大会では西宮北に0対3、総体予選では鳴尾に1対2で連敗。勝村新コーチのもとで気分一新してがんばったのですが、実力差はいかんともしがたいのがありました。

しかし、現在、部員は燃えています。九月の招待試合、秋の高校サッカー選手権予選、また遠く来年一月の阪神大会にビタリとねらうを定め、連日練習に励んでいます。そのため練習試合を多く練習に励んでいます。現在8勝5敗2分です。昨年度以上の成績をとろうと全員はりきっております。(主務佐野雄治郎)

海・甲陽定期戦(六月二十二日於甲陽高)
 中学 2対0 勝
 高校 3対1 勝

監督就任にあたって

勝村 弘也

これまで母校サッカー部の指導にあたってこられた中村真三先輩が、御勤務の関係で、今春を限り監督を辞任されました。そういっ事情から、全く思いもよらなかつたことではありましたが、目下現役部員諸君と接する機会が多いわたくしが四月から高等学校の監督を引継ぐことになったわけです。(伝統ある母校サッカー部諸先輩の活躍に照

して、自分自身のことを考えてみますと、中学・高校時代サッカー部の一員ではあったものの、どうみても指導者としては技量不足、キャリア不足であります。しかし、それだけに一層、生徒と一緒にボールを蹴り、技術をたかめあい、共に考えながら部の運営にかかわっていくことが重要であると考え、そのことを心懸けております。

母校サッカー部を一人倍愛され、ここまで部を育ててこられた中村先輩をはじめ、多くの方々の御努力を無駄にせぬよう、また何れも現役部員一人一人の毎日のサッカー生活が充実したものであることを願いつつ、監督として微力ではありますが力を尽くしたいと思います。

現在、部員数は各学年で一チーム出来るという大変ぐまれた状態ではありますが、新人戦後三年生は一応部活動から離れておりますので、毎日の練習は二十数名となっております。大世帯の部でもあり、先輩の方々には何かと御援助をおおがなければなりません。どうかよろしくお願いいたします。

なお、七月十六・十九日には合宿を予定しております。若手諸先輩の御指導、練習参加を特にお願いたします。(昭和四十年卒・高等学校社会科講師)

計 報

左の方々の計報に接しました。謹しんで哀悼の意を表します。

藤原豊明(第一回)昭和五十年一月
 車谷金治(第一回)昭和五十年一月二十九日

市川 実(第六回)昭和五十年六月九日
 内田幸正(第十二回)昭和五十年六月五日
 住野浩四郎(二十四回)昭和四十九年十月二十三日